



# みらいっうしん

## 6月号

2018年6月1日  
 田園調布学園大学  
 みらいこども園  
 園長 長南 康子

園舎を取り巻く樹々や園庭の草木がその緑の濃さを一段と増しています。梅雨が近づいているのでしょうか、空模様ははっきりしない毎日が続いています。さわやかな気分とは言い難い中を子ども達はいつもの通り元気のよい声を響かせ遊んでいます。その姿を見て、子ども達は季節を問わず、いつでも、どこでも夢中になって遊べるということに改めて感心しました。大人のように、梅雨=重い・鬱陶しいなどのイメージや固定観念がまだ、ないこともあるかもしれませんね。

さて、数日前の登園時に5歳児の子ども達数人が、登園してくる友達や保護者の方に門のところで声をかけている姿がありました。大きな声で我先にと何かを唱えていました。耳を傾けてみると「受粉が成功して、カボチャがなっているよ」と言っているのです。「ジュフンがセイコウして・・・カボチャがなっている・・・??」それを初めて聞いた子どもはもとより、大人も一瞬、何を言っているのか分からない様子でした。5歳児の栽培活動で今年はカボチャを育てていることやカボチャやスイカを实らせるためには“受粉”をさせる作業が必要であり、最近、小さなカボチャの実がなっていることを発見したことが園内のニュースになっていたことを思い出しました。子ども達が早口で一方向的に思い思いに言葉を発していたことは、2、3回、聞き返した後に内容を理解することができました。この場面で考えたことは、言葉を交わすこと、話を伝えることは相手を意識し、言葉をかけた時、相手の表情がどのようなものであるか、自分の投げたボール（言葉）がどのようにキャッチされたかまでを気に留める必要があることに気づけるようになることが大事だと思いました。

しかしながら、この時季の本園の子ども達は栽培活動を通して、“受粉”“畝づくり”“芽かき”など、日常生活の中では余り、聴きなれない言葉を耳にしています。まだまだ、科学的な知識を学習する場ではありませんが、言葉やその意味を体験の中で知ること生活の豊かさに繋がるのではないかと考えます。

日常の中で、子ども達が言葉に対する感覚や言葉で表現する力、また、人との応答的な関わりを身に付けていくように、今後もさらに、指導の充実に努めて参りたいと思います。 (長南)



先日行った「土であそぼう」でのことです。

土の上に座っている0歳児に気付き、5歳児が声をかけていました。すると0歳児が土を握ってあ〜ん…と食べようとしていました。慌てて「だめだめー！」と土をはたき落とす5歳児。口の周りについた土をはらってあげようとする0歳児は“なにををするんだ！”と言わんばかりに両手をばたつかせ、声をあげて怒ります。

よかれと思ってやってあげたことなのに怒られて、嫌な思いをしたかなと思って見ていると、5歳児は少し黙ってからにっこりと笑っていました。自分の思いは通じないけれど、相手の思いを推しはかる…異年齢の関わりを通してそのような体験を積み重ねているひとコマを見た気がしました。 (主幹保育教諭 柳鶴)